

コラム



IT 国家・ 街のヲカシ

ひろのかずお

技術評論家
hiro@khirono.com

「おかしい」は笑いを誘う様を表す。平安のころから、「趣がある」「かわいく愛すべき」もの、反対に「変な」「怪しい」「お粗末」「愚かしい」の意にも用いられてきた。「あはれ」が感傷的なものに対して、「をかし」は客観的な評価のもとで「興味深い」「心惹かれる」場合に使われた。この「おかしさ」の持つ豊かな意味を傍らに、筆者の住む都下某市で見聞するIT事情について述べる。ちなみに、この街の人口は14万人、予算規模430億円、公共公益施設の数200を下らない。

住まいのすぐ近くに市立のコミュニティセンターがある。音楽室・調理室・遊戯コーナーを備え老若男女が集う。ボランティアによるパソコン教室などの催しや、時にはホールでコンサートが開かれる。書棚の前に読書用の机があり、お茶も飲める。ホール受付の脇にパソコンが2台、パソコン教室（1教室7人でこの2台を使うらしい）や使いたい人に供されている。ここで持ち込みのノート型パソコンを使おうとすると、電気は食べさせてもらえない。パソコンの充電を許せば、電気かみそり（今流にはシェーバだが）を持ってきて使う人が出てくるから困ると、年配の館長らしき人に諭される。これは公共施設だ。欧米生活でこんな風に断られたことはないし、パソコンの消費電力（ある調査によれば、庶務作業で稼働時・待機時合わせて1日9時間を均せば20W弱だから）は、蛍光灯1本分。節電はともかく、各自パソコンを持ち込み集め合えばエデュテインメントで、遊戯コーナーも情報活用型に変貌しよう。思想家I. Illichの言うConvivialityな（皆で一緒に生き生き楽しい）世界が広がる。

ところで、ブロードバンドでワイヤレスのモバイル時代、バッテリー問題は大きい。最近では、消費電力が設定できるソフトや、充電の方法も進化している。携帯電話用のMicroFuel Cellによる空気充電も、薄膜フィルムのソーラー電池もある。そのうち充電機能付きバッグや充電機能繊維が実現する。これらでパソコンのモビリティは向上し、ウェアラブルでユビキタスなIT環境に一步近づく。

話を戻す。「電気食べさせて」「パソコンをノート代わりに使わせて」との希望を記名で投書してみた。没書か、なしのツブテ。尊大な代官をこらしめる光圀公の登場を願いたい。と思って2カ月、「声へのお答え」が返ってきた。充電は、「コンセントへの差し込み接続は危険」と「電力の私用禁止」を理由に不許可。前者の理由は意味不明。後者は文明批評家P. Virilio流に言えば、私用が集まってコミュニティができると反論したいが。ともあれ、このインターネット時代に、クイックレスポンスの双方向コミュニケーションがままならぬ。

e-JAPAN 計画実行中の IT 国家日本、その首都近郊で感じる愚かさを憂う。国民からの E メールに、ボランティアのサポートも得てせっせと返信したホワイトハウスを真似るのがよい。

歩いて 15 分、図書館へ行く。哲学の歴史とともにあった図書館だ。古代前 3 世紀のアレクサンドリアのそれは、Ptolemies1 世が学者 Demetrius を招いて計画し、地中海、中近東、果てはインドの文献も集めたといわれ、権力の「知」の象徴としての国際的図書館だった。このような歴史は持つものの、図書館の運営やサービスはあまり進化していない。OPAC で調べたいとカウンターにいる妙齡の女性に頼むと、ナンとかいう作家の作品ですかときた（この街では、OPAC の運用実績があるのに）。筆者の好きな開高健の「オーパー」を連想したらしい。司書っていないのかしら。いっそのこと、リファレンスサービス用などに、対外接続用端末の 1 台があればどんなに重宝するか。この調子なら、地方自治体は、図書館運営を近くの大学にアウトソーシングし、専門性やアーカイブとしての機能を充実させたほうが、税金の無駄遣いにならない。それに、本が好きで本とその周りのことを尋ねられれば、質問者と一緒に調べようとする欧米の図書館員くらいのサービスは欲しい。

館内は、ベストセラー小説とハウツー物が幅を利かし、駅前書店風。かの D. Hilbert の「数学の諸問題」(Mathematische Probleme) に関する専門書があるのに、D. E. Knuth らの「コンピュータの数学」(Concrete Mathematics : A Foundation for Computer Science) はない。WORD, EXCEL, OFFICE などが仰々しい。

図書選定について問うと、委員会があってそこで選ぶとの答え。それは組織の話だ。こちらはどんな考えと基準で選んでいるのかを知りたい。基準がないなら、たとえば、コンピュータサイエンスや IT に夢を託す会員たちの情報処理学会に、「情報」の知の体系について照会すればよい。この辺で、IT 国家の国民向けに、「情報」の科学・技術とその隣接領域を含む IPSJ 推薦図書リストが欲しい。これらをネタに、IT について「いかに」「なぜ」「何を」と、市民が語り合うというのはどうか。

ここでも、パソコンの使用はお断り。理由が 1 つ加わる。ヤカマシイのだそうだ。S. King が Four Past Midnight の中で、図書館では案内板上の「静粛」という文字にじっと見つめられ睨まれているようだ^{と表現しているのを思い出した}。筆者は、調べ物をしながらの執筆で音声入力に頼ることが多い。対面朗読室を設けている図書館もあるが、ガラス張りではいから「音声入力（発声）室」があれば嬉しい。この部屋を少し広く作れば、点字ソフトや手話ソフトなどを使って身障者との会話もできる。イネーブルウェアやアクセシビリティについて、実際の知見も得られよう。貸し出し用の CD で、

美しい日本語の発声や朗読、楽器の演奏練習もできる。今も、図書館には人と情報とを結び良いヒューマンインタフェースが少なすぎる。

隣り街の市立図書館で、インターネットが使えますとある。アクセスできるのは地域案内の類の情報。インターネットは情報の新たな結合方法を生むし、インターネット自体が大きなバーチャルな図書館だ。アクセスコントロールの必要性はあるものの、集めた情報で語学の勉強から審美眼の体得まで、無限の情報活用の視点が生まれ実行できる。

上の例をもって、地方自治体のていたらくを言うつもりはない。情報と、地域社会・地域産業・市民生活などを結びつけ地方のあるべき姿を模索した例はあったし、今もある。そして、これらの施策の成功要因は、情報環境とこれを維持する人々にある。

まずは、情報環境である。近未来の科学技術研究の情報システム環境として、LAN で 10Gbps, WAN で 100Gbps, 100GFLOPS ~ 1TFLOPS のノード間の相互接続が話題になる時代だ。仮想社会と実環境の乖離する現在を見直し、両者の関係を結びつける情報ネットワークとコンピューティング環境「超環境」を構築する必要性も説かれている（青山友紀, 「ネットワーク新時代」, Gigabit Network Symposium 2001）。「IT の極意は情報の発信にあり」として、コンテンツ時代幕開けの宣言もある（安田浩, 「超高速ネットワークとコンテンツ」, 前掲シンポジウム, 2002）。エージェント技術の成果も出てきている。デジタルホログラフィの研究も進んでいる。デジタルアーカイブの文化的意義や産業的戦略性は言うに及ばない。地方の中心にショッピングモールを作るように、図書館・博物館・美術館の類がインテリジェンスコンプレックス（知の複合施設）として集約配置され、世界中のそれらが網で結ばれ、リアルでもバーチャルでも情報の狩猟・生産・流通ができる日は遠くあるまい。而して人は自分の背後の世界を広げ、目の前の世界をそれまでとは違った眼で見る。

他方、エンドユーザである市民の近くにいて公共施設でサービスに携わる人たちについてはどうか。彼らの情報活用・提供の質が上がるよう、サービスに必要なスキルセットなどは明確にすべきだ。こう考えると、中間的または技師的階層の人々の払底による IT の浸透力の弱さや、情報活用術の育成環境に粗末さを感じてしまう。良い構想も、末端に行くほどその密度は疎になっていく。突出し優れた人材は必要だが、加えて、中間的な存在として市民とともに考え語り合う良きパイプレイヤーは、地方の公共公益施設が持つ本来の役割や情報機能を高め、e-JAPAN をより強固なものにするにちがいない。

(平成 15 年 4 月 2 日受付)